

## 「半径3メートル」からの脱出法

仁平 典宏（教育学部）

私は、教育学部の比較教育社会学コースというところにいる。一言で言うと、「教育＝善」という教育トークにありがちな前提をカッコに入れて、教育システムにおける問題が、どういう社会的・経済的・政治的要因のもとで起きているのか、国際比較の視点も駆使しつつ、その構造や因果関係を社会的に分析するコースである。重要なのは現状に対する批判的視座だ。だから同僚の先生方（私を含めて6名いる）には、現行の教育に対する問題意識を昔からお持ちだった方が多い。ある先生は、外国でエスニックマイノリティとして現地の学校に通った経験から、日本の学校の多様性を抑圧する構造に対して批判的研究を蓄積されてきた。別の先生は、「人間性」や「コミュニケーション能力」という曖昧なもので評価しようとする日本の選抜システムへの、学生時代からの怒りに突き動かされながら、そのような評価に左右されない「専門性」を育成する教育を模索されている。

ところが、私は「若い頃からの問題意識」がない。これは社会学をする上でプラスではないし、今回のように「自分はなぜこの進路を選んだか」というような話を書くときに困ることになる。自分は若い頃何を考えていたのか、むしろ考えていなかったのか。

少し振り返ると、僕は茨城県の公立学校教員の家庭で育ち、特に不自由のない生活を送らせてもらってきた。地元では進学校と呼ばれる県立高校に進学し、現役で文Ⅲに入学してからは、プライベートやサークルで楽しい日々を過ごした。だが、楽しかった駒場時代で現在の糧になっていると思えることは——人間関係資本（ソーシャルキャピタル）の面でも人的資本（ヒューマンキャピタル）の面でも——残念ながら無い。当時自分は、大学は受験勉強と仕事に挟まれた「人生のボーナスステージ」くらいにしか思っていなかった。バブル崩壊後の浮かれた空気が微かに残存していた大都会に上京し、洋楽や小室ミュージック（！）が流れるクラブで踊ったりしていれば「東京の大学生」っぽくなれると思っていた。かなり恥ずかしい。

大学は大学で、今のように教育に対して真剣に向

き合っただけでなかったと思う。「大学はレジャーランド」という社会通念が強く、それが大学を甘えさせていた。当時の社会的背景は次のようなものだ。日本型雇用慣行が一般的だったが、その中核にあるのは世界で随一の「メンバーシップ型雇用」である。内部労働市場を前提に、必要な知識は会社がOJTによって全て教えるという信念に支えられていた。よって経済界は大学に人的資本形成を期待しない。「変な知識」をつけずに「健全」なまま、コミュニケーション能力と忍耐力を鍛えておいてくれればいい。同僚の本田由紀さんはこれを「赤ちゃん受け渡しモデル」と呼ぶ。だから、大学の授業にもわりと適当なところがあった。思想系の文献講読の授業だったと思うが、初回に出ると、「前年度読み終えたところ」の「次」の箇所から始まり、開始一分でついて行けなくなったことがある。

問題は、そんなグダグダでも、卒業でき「いい」職場に入れたことだ。日本型生活保障システムの要石は、公的社会保障の代替機能を果たす企業福祉にある。大企業のメンバーシップを獲得できれば、堅い雇用保護と家族支出に対応する年功賃金制の恩恵を与えることができる。当時の僕たちは、「東大に入ったから後はイージーモード」という認識をどこかで織り込んだ上で、サークルやプライベートの人間関係に頭を悩ませたりする冴えない日常を送っていた。もちろん、そのような「悩み」に興じられること自体、僕が置かれていた社会内位置のおかげだったと言える。僕には、生活の不安もなく、大学まで進学させてくれた親がいた。差別を受ける心配もないマジョリティに属していた。いつか自分が本当にやりたいことを見つけ、力を発揮することのできる未来を、漠然と信じていた。

もちろん、日本社会に多くの問題があり、世界にも困難が満ちていることは、授業で学んではいた。だがそれは、いつも遠くの「どこかの誰か」の話だった。授業という限られた場面を通してのみ触れるバーチャルなリアリティだった。急いで付け加えると、もちろん当時もそんな碌でもない大学生ばかりではなかった。同級生の中にも、社会問題の改善に向けて運動をしたり、困難な人たちへのボランティア活動に打ち込む人たちがいた。彼・彼女らは、僕にとって位置づけの難しい存在だった。「どこかの誰か」の話のはずが、彼らを通して急に実体を帯び

ていく。彼らがやっていることが社会的に価値があると評価される分だけ、僕の半径3メートルのささやかな小宇宙が否定される気がする。僕は、そうすれば自分の世界の価値を守れるとでもいうように、彼らやその運動・活動にシニカル（冷笑的）なまなざしを浴びせた。「自己満足じゃないの?」「そんなことやって意味あるの?」「偽善っばいよね」……。

そういいながらも、漫然と過ぎていく日々はどこかで焦りも感じていた。実際に、社会は——現在と同じように——激動期だった。自分が大学生の間だけでも、阪神淡路大震災（官の限界が露呈）、地下鉄サリン事件（ポストモダニズムの臨界）、日経連「新時代の『日本的経営』」発表（雇用流動化の端緒）、薬害エイズ事件で関係者逮捕（省庁再編の契機の一つ）、六大改革開始（新自由主義的改革の端緒）、山一証券破綻・北海道拓殖銀行破綻（長期不況の決定化）などの戦後日本の転換点たる出来事が起こっている。

大学2年の進振り時には、半径3メートルに安住したいという思いと、そこから出て「社会」と出会いたいという思いが交錯していた。「社会」と言っても問題意識があるわけではないので、なるべく価値から距離をとって、「客観的」に分析してみたいと思い、社会学を親学問に選んだ。一方で、そこでも少しは価値にもコミットしてみたいという欲も働き、教育研究を選んだ。そのようなわけで教育+社会学=教育社会学を学ぶ比較教育社会学コースを選んだというわけだ。どこまでもいい加減である。

ところが、結果的には正解だった。適当に選んだそこは、半径3メートルから出るための態度と方法論を修得できる最適の場所だった。二人の先生の名前を挙げておきたい。心理人類学の箕浦康子先生（現、お茶の水女子大学名誉教授）からは、フィールドワーク実習の授業で、自分にとっての「当たり前」を相対化するために、「自分から一番『遠く離れてる』」と思うところをフィールドにしなさい」というアドバイスをもらった。フィールドとして知的障碍児の通所施設を選び、そこでボランティア活動をしつつ、同世代のボランティアの意味世界の探求をテーマにした。それまで「意識高い」と敬遠していた人たちだ。接してみると、半径3メートルを大事にする「普通」の若者たちだった。でも半径3メートル（親密圏）と障害者福祉の領域（公共圏）とが自然と地続きになっている。そういう在り方を、それを可能にする

技法を、彼・彼女たちから学んだ。

もうひとは、社会学の荻谷剛彦先生（現、オックスフォード大学教授）である。一年間の計量社会調査の実習を通じて、個人の意識や行為の「背後」にある社会的要因の存在を実証的に捉える方法論と考え方を学んだ。「半径3メートル」を規定するものである。それは、出身家庭の階層、ジェンダー、出身地域、エスニシティなど様々だったが、自分の小宇宙がいかにも偏った形で構成されているか気づかされた。

知的緊張のある日々の中で、それまで普通に就職（マスコミ志望）するつもりだったが、もう少し勉強したい気になってきた。先程述べたように、社会は激動期だった。就職氷河期に突入り、若者を中心に失業率や非正規労働者が増えていた。これまでの「当たり前」が、社会から急速に失われていくことを感じていた。何が起きているのか自分なりに知っておきたいという気持ちが勝り、大学院に進学することにした。

その後の研究テーマは大きく分けて2つに分かれる。一つは「当たり前」が壊れる中で顕在化・深刻化してきた貧困や社会的排除に関する分析である。2000年代の構造改革が日本型の生活保障システムを壊していく中で、山谷や中野区でホームレスの支援活動と調査を続け、自分なりの社会保障の見立てを構築した。今は、雇用の劣化や子どもの貧困問題への処方箋とされる「社会保障と教育の接続」の問題点の分析を行っている。もう一つは、シニカルなまなざしの解明である。公共的な問題に対し発言したり活動・運動する人に対するシニシズムは、今の日本にもはびこっている。それは、かつて自分の中に巣食っていたものだ。その「まなざし」が日本でいかに構成されていて、どういう帰結を伴うのか。単著では、明治から2000年代までの「ボランティア」に向けられた言説を分析したが、それはそのための準備作業でもある。

結果論でしかないが、進振りには、半径3メートルを規定する「外」の力と向き合うための方法を学ぶ機会を、私に与えてくれた。現在も激動の渦中である。既存の答が失効する中で、外部を捉えコミットするために有効な知と出会いを、皆さんが専門課程で得られますことを祈っております。